平成２６年９月１５日（月）

老球の細道６１号

トステインクリニック「選手はコーチの鏡！」

会津バスケットボール協会理事長　　室　井　冨　仁

１５年前になるだろうか、ドイツから来た２０代後半の一人の若者から話を聞いた「なぜバスケットボールのコーチになろうとしたのか？」。その若者曰く「東西ドイツの統一で優秀なバスケットボールアスリートが一つのチームになれる。そうすればドイツのバスケットボールもオリンピックで金メダルがとれる。その代表のコーチになりたい」。

その若者はちょっとした縁で会津に来てバスケットボールクリニック（講習会）をする機会を得た。それに受講生として参加した私は衝撃を受けた。目的を持った系統的、発展的段階によるドリルの組み立て方、当時はまだメジャーではなかったコーデイネーションドリルの面白さ、そして選手のモチベーションアップの巧みさ、今まで受けたクリニックにはまったくなかった斬新なものばかりであった。「この若者はできる！凄いコーチになる」と、その時直感した。

案の定､あれからドイツのプロチームのヘッドコーチを経ながら日本に再度やって来た。ＪＢＬチーム「トヨタ」を優勝に導いたり、低迷していた「レバンガ北海道」を再建したりして日本バスケットボール界に新風を吹き込んだ。そして今、日本全体の底上げを日本協会に依頼されて「日本バスケットボール協会アソシエイトコーチ」の任に就いている。将来の日本代表の玉子たちの指導に日夜明け暮れる日々なのである。

その若者こそ（今は中年の入り口に入った）トステイン・ロイブル。その「トステイン・クリニック」が９月１３日（土）１４日（日）と開催された。今年で１４年連続１６回目になる。地区協会の開催数としては日本でＮＯ１だと思う。残念なことは、会津でコーチをやっているのにトステインのクリニックに一度も参加したことのないコーチがいることである。最高のものを学ばず子どもたちに何を伝えようとしているのか？

なぜ彼のクリニックがわが会津でこれほどまでに続いているのか。それは彼のバスケットボールコンセプトが会津協会のそれと合致するからに他ならない｡そのコンセプトとは、正しいファンダメンタルの習慣とチームプレーの熟練、そして情熱と努力で、タレントがいない普通のチームでも、能力あるタレント軍団に勝つことはできるということである。

いつも思うことであるが、このような講習会になると「引っ込んだ杭」になってしまうその他大勢の選手がいる。私はこのような選手が自チームから出ないためにも、かつて選手に言い続けてきたことが三つあった。一つは、練習は一番最初にやれ。二つは、常に講師のそばでプレーせよ。三つは、一番声を出せ。このようなアクションによって講師の目に留まり、直接指導を受けるチャンスが増えるのである。その結果、１日で上手になる。

ほとんどの選手はこれができない。できるだけ講師から離れて、引いて練習に参加している。自ずと講師からは目もかけられないし、声もかけられない。なんてもったいないことなのだろう。日本一の指導者が目の前にいるのに自ら上達を放棄している。

「出過ぎた杭」になることを、各チームの指導者は選手たちに教えてほしい。トステインがいみじくも私たちコーチに向かって断言した「選手はコーチの鏡である」と。あまりにも「引っ込んでいる杭」の選手たちに業を煮やして言ったのか。指導者も同じである。

意欲のある者は超一流のものに接しよう。そこに現在の実力なんては関与しない。